

# 中国語におけるテキストの結束性をもたらすゼロ照応について

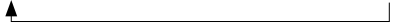
譚 昕

## 1. はじめに

テキスト<sup>1)</sup>が成立する要件の一つは、テキストの結束性<sup>2)</sup>である (Halliday & Hasan1976)。結束性をもたらす働きとして、指示、省略、代用、接続、および語彙的結束性が挙げられるが、そのうちの指示表現は、テキストの展開において重要な役割を持つ。Halliday & Hasan (1976) は、指示表現の下位概念を「代名詞」による指示表現、「指示詞」による指示表現、「比較語」による指示表現の3つに分けている。その具体例を以下(1) - (3)に示す。


### (1) 「代名詞」による指示表現

John has moved to a new house. His house is big and beautiful.




### (2) 「指示詞」による指示表現

We went to see the movie last night. That was the first outing for months.



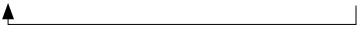
### (3) 「比較語」による指示表現


John has a big dog. Tom has a dog twice as big.



(1) - (3) では、波線部の語が下線部の語を指している。波線部のような、指す側の要素を照応詞、指される側の要素を先行詞と呼ぶ。先行詞と照応詞の間には照応関係がある。それにより、先行文脈と後方文脈の「結束性」が生まれることがよく分かる。

一方、(4)においては、2文目の「テーブルの上に出してあった」ものは、1文目の「昼ごはん」であるが、これを省略なしで書くと「昼ごはん、食べた？ テーブルの上に（昼ごはんを）出してあったでしょう？」となる。この場合、省略された言語表現 $\emptyset$ は、先行文の「昼ごはん」を指示し、両者は照応の関係を作している。同じく(5)においても、省略された言語表現 $\emptyset$ は、先行文の先行詞「周文兴」を指し示しており、両者は照応の関係があることが分かる。このように、主語や目的語などテキストの主要構成要素をなす語が省略される場合、その省略された要素（照応詞）と、同じものを指す語（先行詞）は「ゼロ照応」の関係にある。言い換えれば、照応詞が音形をもたない表現（ゼロ）である場合を「ゼロ照応（zero anaphora）」と呼ぶのであり、記号 $\emptyset$ を用いて表す。

(4) 昼ごはん、食べた？ テーブルの上に $\emptyset$ 出してあったでしょう？  
 (『現代日本語文法⑦』)

(5) 周文兴把两只耳朵张得圆圆的， $\emptyset$ 细听每一个字。 (蔣平2004)  


[周文興は耳をすませ、一言一句をよく聴いていた。]

ゼロ照応は、中国語と日本語にともに頻繁に起こる言語現象である。本稿では、このゼロ照応がテキストの結束性をもたらす際の日中対照研究の一部分として、まず中国語におけるゼロ照応の特徴およびその働きを検討する。

## 2. 先行研究

### 2.1 ゼロ照応の定義

前述のように、ゼロ照応とは、先行文脈にすでにある言語表現を、音声形式を持たない形式で指示することを指す。尹邦彦（1999）では、ゼロ照応について、談話構造における特殊な指示表現であり、音形を持たず意味を持っており、ゼロ形式を通じて先行詞を指し示す、と述べられている。また、蔣平（2004）

では、ゼロ照応とは、言語表現において同じ物事に再び触れる際に、それをゼロ形式で指示し、見た目では明示的な言語マークや音声が見られない指示現象である、と説明されている。

一方、ゼロ照応は非明示的指示表現であるため、テキストにおいて、ゼロ形式の照応関係が確かに存在しているか否か、それを判断することが重要である。このゼロ照応の判断基準について、テキスト全体の文法構造と意味を通じて判断すべき、即ち、意味上では、前文のある物事と同じものを指しており、しかも文法上では顕示する言語表現がない場合、ゼロ照応の働きがあると判断できる、という方法（陈平1987）、また、相応たる述語がある場合は、同一話題展開のテキストにおけるゼロ照応<sup>3)</sup>の働きがあると判断できる、という方法（朱勘宇2002）、さらに、動詞の項構造に基づいてゼロ形式の意味要素が存在するかの研究により、文の表面文字列（surface string）において意味要素の数が述語動詞の項数より少ない場合、その文にはゼロ形式の意味要素があると断定できる、という方法（王德亮2005）もある。一方、連動文における先行詞の確定について述べた研究には、徐赳赳2003がある。徐赳赳2003では、語用要素と意味要素（主に動詞の意味）こそ先行詞を確定できる主な要素であり、文法要素（主に文法構造）は主要な判断要素ではなく、コンテキストの情報が多いほど先行詞確定の精度がより高い、と述べられている。徐赳赳2003が挙げた例文を見てみよう。

（6）（病人无奈，只得返回金华，）最后抱着一线希望的来到金华中心医院  
Ø请求吴凤堂手术治疗。

[（患者は仕方がなく、金華へ引き返した）最後のわずかな希望を抱いて金華セントラル病院へやってきて、呉鳳堂に手術してもらえるように頼んだ。]

（6）は“抱着（抱いている）”、“来到（～まで来ている）”、“请求（願う）”の3つの動詞によって構成される連動文である。ゼロ照応表現と文の動作主は同

一指示となっているが、最初の文の動作主もゼロ照応であるため、先行文脈を参照し“病人（患者）”がゼロ照応の先行詞であることが判断できるのである。

## 2.2 ゼロ照応の特徴と機能

まず、ゼロ照応が成立する言語環境の特徴について、陈平（1987）は、先行詞が強い連続性をもつこと、および照応詞が強い継続性をもつことは、ゼロ照応が成立する必須条件であり、同一話題展開のテキスト（下の図式に示す）において、ゼロ照応表現がよく用いられる、と指摘している。

$$T_1 + (C_1 \rightarrow C_2 \rightarrow C_3 \rightarrow \dots \rightarrow C_n)$$

さらに、中国語において最も強い連続性を持つ先行詞は主語であり、次に、新情報<sup>4)</sup>を表す存現動詞および他動詞の目的語である、最も強い継続性をもつ照応詞は主語であり、次に、目的語であると述べている。陈平（1987）が挙げた例文を見てみよう。（7）では、後続文の主語は先行文の主語となる名詞性成分である。（8）では、後続文の主語は先行文の存現動詞の目的語である。（9）では、後続文の主語は先行文の動詞の目的語である。この3つの例文のように、先行詞が一定の文法的働きや新情報としての働きをもつのであればその連続性が強くなり、後続文の照応詞もゼロ照応になりやすい。

（7）楚世杰坐起来， $\emptyset_1$ <sup>5)</sup>发了阵愣， $\emptyset_2$ 才摆脱睡意。

[楚世傑は体を起こし、しばらくボーっとして、ようやく眠気が収まった。]

（8）来了一群作家， $\emptyset_1$ 发动社员写诗歌。接着又来了一批画家， $\emptyset_2$ 教给社员作画。

[多くの作家たちが来て、詩を作るようにと大衆を動員した。続いてまた多くの画家たちが来て、大衆に作画を教え込んだ。]

（9）欧有旺续了个离婚的“活人妻”， $\emptyset$ 带过来一大堆东西。

[欧有旺はバツイチの「活人妻」を後妻にした。たくさんの荷物をもってきた。]

陈平 (1987) はさらに、ゼロ照応の制約要素について、文法構造上の制約と意味上の制約に分けて検証を行っている。そこでは、文法構造上では、照応詞と先行詞との間に他の文が存在しても、それらの文が先行文にある動詞の支配する成分 (項) である場合にはゼロ照応を用いることができ、また、意味構造上では、先行詞のある文と照応詞のある文をつなぐ部分は、意味構造における階層が低いほど先行詞のマクロ的連続性<sup>6)</sup> が強くなり、ゼロ照応になる可能性も大きくなると結論付けられている。一方、蔣平 (2004) では、先行詞が主語の連体修飾格である場合においても、後続文でゼロ照応を用いることができる、と指摘されている。蔣平 (2004) に挙げられた例文を見てみよう。

- (10) 他的脸色突然变了, Ø 心头不知是高兴呢, 抑是生气……

[彼の顔色が突然変わった。心の奥では喜んでいるのだろうか、それとも怒っているのだろうか…]

- (11) 范博文的脸色又变了, Ø 只差没转身走掉。

[范博文的顔色がまた変わった。すぐさま行ってしまいたいところだった。]

- (12) 菜园子的事情以前归父亲和哥哥管理, 他只知道吃黄瓜, 吃辣椒, 才不管猪呀羊呀进Ø<sub>1</sub>来不进Ø<sub>2</sub>来呢!

[畑のことは以前は父親と兄の管理に任せていた。彼はキュウリを食べたり唐辛子を食べたりするだけで、豚や羊が (畑に) 入ってくるかなんて全く無関心だった。]

(10) - (12) は先行詞が主語の所有格をなしている。(10) においては、後続文の主語所有格である“他的 (彼の)”はゼロ照応表現として用いられている。(11) においては、後続文の主語である“他 (彼)”はゼロ形式で表現されている。(12) においては、後続文の目的語である“菜园子 (畑)”も同様にゼロ照応表現で表されている。

また、ゼロ照応の働きについて述べた研究には、久野1978、今井1992、陈

平1987、屈承熹2006がある。久野1978、今井1992では、結束手段としてのゼロ照応の働きは、情報の伝達において、冗長度を下げるという経済的な手段であると指摘されている。一方、陈平1987、屈承熹2006では、ゼロ照応は文の主語もしくは目的語となり、後続文の主語が先行文の主語と同じ物事を示すようにする既存話題の維持、後続文の主語が先行文の主語と違う物事を示すようにする新規話題への転換、という話題の維持・転換機能をもつと指摘されている。

### 2.3 まとめ

以上、中国語のテキストにおけるゼロ照応という指示表現に関して、本稿の着目点に近い先行研究をまとめてきた。まず、ゼロ形式の照応関係を判断する方法には、それぞれ、陈平（1987）の文法意味構造による方法、朱勘宇（2002）の同一話題展開テキストの述語による方法、王德亮（2005）の述語動詞項による方法の3つが挙げられる。また、連動文における先行詞の確定については、語用的要素と意味的要素を用いて判断すると徐赳赳2003が指摘している。次に、ゼロ照応の成立要件については、強い連続性をもつ先行詞と強い継続性を持つ照応詞があることが成立要素として挙げられており、さらに文法構造上および意味構造上の制約もある（陈平1987）との指摘もあれば、先行詞が主語の所有格をなす場合も、後続文にゼロ照応を用いることができる（蒋平2004）との指摘もあった。また、ゼロ照応の機能については、情報伝達における経済性（久野1978、今井1992）、および話題の維持・転換（陈平1987、屈承熹2006）という機能をもつことも指摘されている。

本稿は、上述の先行研究を手掛かりに、本稿の着眼点であるゼロ照応詞の文法的位置および先行詞との距離による相違、さらにゼロ照応の語用的特徴を中心に、現代中国語におけるテキストの結束性を与えるゼロ照応について検証する。

### 3. 具体例の考察

#### 3.1 分析材料と分析方法

ゼロ照応という指示表現は、現代中国語において頻繁に用いられる。本稿では中国語におけるゼロ照応を検証するために、北京大学現代中国語コーパスおよびインターネットにて、5篇の短編小説、散文、話劇をランダムに選び、分析の材料として用いる。

分析方法は、収集した例文を考察した上、先行研究の主張を検証する。

#### 3.2 具体例の考察

以下は今回収集した例文をもとに、ゼロ照応詞の文法的位置、明示的先行詞との距離、文体の差異に見られる語用的特徴という3つの角度から、現代中国語におけるゼロ照応について考察を行う。

##### 3.2.1 ゼロ照応詞の文法的位置

ゼロ照応詞とその先行詞を確定する重要な手段の一つは、ゼロ照応詞の文法的位置から判断する方法である。分析材料より収集したデータを文法的位置別に分類した結果はグラフ I の通りである。

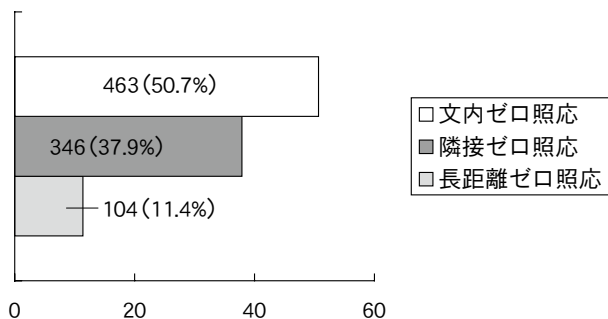
グラフ I に示すように、使用される頻度はそれぞれ異なるが、ゼロ照応詞は文主語、目的語、所有格という文法要素としての果たしていることが分かる。この結果は先行研究（陈平1987、蒋平2004）の指摘と一致する。

- (13) 壮年男子拉一辆板车,  $\phi_1$ 弯腰,  $\phi_2$ 低头,  $\phi_3$ 身子前倾,  $\phi_4$ 赤脚踩进泥里。

(《回家》)

[壮年男子はリヤカーを引いて、腰をかがめ、うつむき、体を前に傾かせ、裸足で泥を踏みしめている。]

- (14) 左传中有这样一个故事：齐景公非常疼爱小儿子荼。有一次，齐景公陪荼戏耍,  $\phi_1$ 为了让爱子高兴, 他口里衔根绳子,  $\phi_2$ 扮作老牛的样子,  $\phi_3$



グラフⅠ 文法位置別のゼロ照応詞数

让茶骑着，牵着玩。不料， $\emptyset_4$ 孩子脚下打滑跌倒， $\emptyset_5$ 把齐景公的牙齿拉断了。（《牙齿的故事》）

[左伝にはこんな故事がある。齊景公は末男の荼をとても可愛がっていた。ある日、齊景公は荼と遊んでいた。愛息子に喜んでもらうために、口に紐をくわえ、牛に扮して乗らせたり、引っ張らせたりした。思いもかけず、息子が足を滑らせて転んだので、齊景公の歯が抜かれてしまった。]

- (15) 繁：大概是窗户，没有开。[おそらく窓のせいでしょう。開いてないから。]

冲：我来开 $\emptyset_1$ 。[私が開けよう。]

四：老爷说过不叫开 $\emptyset_2$ ， $\emptyset_3$ 说外面比里面热。[旦那様が開けないようにおっしゃいました。外は中より暑いとおっしゃいました。]

繁：不，打开 $\emptyset_4$ 。他在外头一去就是两年不回家，这屋子里的死气他是不知道的。[だめ、開けて！彼は二年も家に帰って来なかったので、この部屋に沈滞している空気が分からないのだ。]（《雷雨》）

- (16) 你怎么这么犟呢！不管怎么说，人家毕竟是个管人事的科长， $\emptyset_1$ 年纪大了点不假，可 $\emptyset_2$ 身体好着呢！（《野百合也有春天》）[固執しすぎないで！]



どうであっても、彼は人事課の課長だもの。確かに年老いたけれど、体はとても丈夫だよ。]

(13) では4つのゼロ照応表現が用いられている。 $\emptyset_1$ と $\emptyset_2$ は動詞述語文“弯腰(腰をかがめる)”“低头(うつむく)”の動作主(主語)となっており、 $\emptyset_3$ と $\emptyset_4$ は主述述語文“身子前倾(体が前に傾く)”“赤脚踩进泥里(裸足で泥を踏みしめる)”の主語となる。 $\emptyset_1 \sim \emptyset_4$ はともに“他/壮年男子(彼/壮年男子)”を指し示す。(14) では、5つのゼロ照応がそれぞれ3つの照応要素を指している。 $\emptyset_1 \sim \emptyset_3$ は、動詞述語文の主語になっており、“他/齐景公(彼/齐景公)”を指す。 $\emptyset_4$ は、上下文脈に基づいて、“他/齐景公(彼/齐景公)的”を指し示すことが分かる。 $\emptyset_5$ は動詞述語文の主語であり、すぐ前の文の主語と同じで“他的孩子(彼の子供)/茶”を指している。(15) にも2種類のゼロ照応が存在する。 $\emptyset_1$ 、 $\emptyset_2$ 、 $\emptyset_4$ は目的語であって、“窗户(窓)”を指しており、 $\emptyset_3$ は主語であって、“老爷(旦那様)”のことを指し示す。(16) の $\emptyset_1$ と $\emptyset_2$ は、連体修飾格<sup>7)</sup>として“他(的)”を指しており、ゼロ照応なしで書くと“他(的)年纪大了点不假,可他(的)身体好着呢!”となる。

まとめてみると、グラフ1に示すように、ゼロ照応表現のうち、ゼロ主語の使用頻度が最も高く、全体の8割を占めているのに対して、ゼロ目的語の使用頻度が比較的低く(全体の1割)、ゼロ所有格(連体修飾格)の使用頻度が最も低い(1割未満)。この結果は、陈(1987)に提示された観点、「照応詞が強い継続性を持つことは、ゼロ照応が成立する必須条件の一つである。中国語における最も強い継続性を持つ照応詞は主語である」、ということに一致する。

### 3.2.2 明示的先行詞とゼロ照応詞の距離

ゼロ照応は、先行詞とゼロ照応詞が同じ文にある場合は文内ゼロ照応、それぞれ異なる文にある場合は文間ゼロ照応の2つに分類される(王徳亮2005)。さらに、文間ゼロ照応は隣接ゼロ照応と長距離ゼロ照応の2種類に分けられる。隣接ゼロ照応の場合は、ゼロ照応詞がある文は先行詞がある文のすぐ後に

ある。それに対して、長距離ゼロ照応の場合は、ゼロ照応詞がある文と先行詞がある文との間に他の文が存在する。例文(13)、(14)と(17)を見てみよう。

(17) 郑晓慧离开时、周一珍亲自目送她走进电梯。 $\emptyset_1$ 返回家后 $\emptyset_2$ 把锅里的饭收拾到饭桌上。(《最后的诊断》)

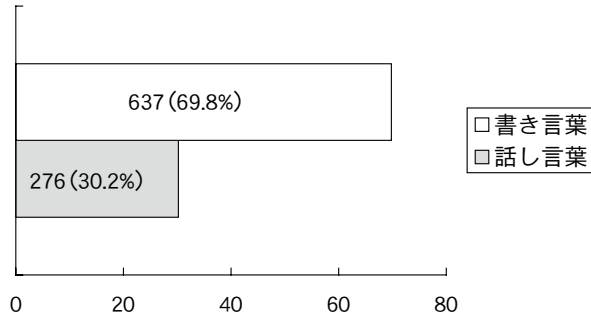
[郑晓慧が帰る際に、周一珍は彼女がエレベーターに乗るのを見送った。家に帰ると、鍋のおかずをテーブルに並べた。]

(13) においては、4つのゼロ照応詞が同じ文にある先行詞“壮年男子(壮年男子)”を指しており、文内ゼロ照応となっている。一方の(14)と(17)は、文間ゼロ照応の表現も用いられている。(14)においては、ゼロ照応詞 $\emptyset_4$ の先行詞である“他/齐景公(彼/齐景公)”がすぐ前の文にあるため、文間ゼロ照応の隣接ゼロ照応表現となっているのに対して、ゼロ照応詞 $\emptyset_5$ の先行詞である“茶”が、だいぶ離れた先頭の文にあるため、文間ゼロ照応の長距離ゼロ照応表現となる。(17)においては、 $\emptyset_1$ と $\emptyset_2$ の先行詞である“周一珍”はすぐ前の文にあるため、隣接ゼロ照応の関係となる。

本稿で収集したデータを分析しまとめた結果、グラフⅡに示すように、913例のうちの463例が文内ゼロ照応であり、全体の半分を占めていることが分かった。さらに、文間ゼロ照応のうちの隣接ゼロ照応が346例で全体の約4割を占めている。一方、文間ゼロ照応のうちの長距離ゼロ照応は104例で全体の約1割を占めている。このデータを通じて得られた結論としては、照応詞とその先行詞との文間距離が近いほど、ゼロ照応表現として使用される可能性が高い。その理由の一つとして、聞き手(読み手)がより近い文脈からゼロ照応詞の照応要素である先行詞に関する情報を得られて、認知しやすいということが挙げられる。

### 3.2.3 異なる文体におけるゼロ照応の働き

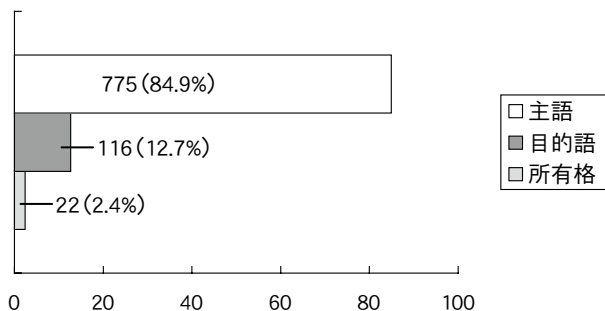
文体は話し言葉に基づく口語体、および書き言葉に基づく文語体の2種類に



グラフⅡ 分間距離別のゼロ照応

分けることができる。異なる文体において、ゼロ照応という指示表現はどんなはたらきを持つのだろうか、どんな語用的特徴があるのだろうか。高原（2003）は、話し言葉において代名詞がよく使用されるのに対して、書き言葉においてゼロ代名詞がよく使われる、ということを述べている。また、話し言葉と書き言葉との違いについて、1）しゃべることは書くことより速い、2）話し手と聞き手との相互作用はその場で発生するものであり、書き手は時間をかけて自分の考えを整理し、合理的に行うことができる（高原2003）、とまとめられている。

以上の1）と2）から、書き言葉にゼロ照応が用いられやすいという予測結果が得られる。本節はその予測について例文考察を通して検証した。集計の結果はグラフⅢに示すように、913例のゼロ照応表現のうち、約7割が文語体（書き言葉）によるものであることが分かった。それは、ゼロ照応表現は話題の維持、連続機能をもつ（陈平1987、屈承熹2006）ため、文章に強い連続性とながりを与えられるので、読み手が情報の認知をしやすいという理由が考えられる。その一方、会話等の口語体ではゼロ照応の使用頻度が低い原因について、話し言葉の特徴（しゃべることは書くことより速い、話し手と聞き手との相互作用はその場で発生するもの）によって、聞き手がゼロ照応の先行詞を



グラフⅢ 文体別のゼロ照応詞数

判明しにくい情報情報の認知ができない、或いは間違いやすいという理由が考えられる。

例文(14)と(15)を見てみよう。(14)と(15)はそれぞれ文語体(書き言葉)と口語体(話し言葉)で書かれている。(14)においては、3つの複雑な文によって構成されているテキストは、5つのゼロ照応表現を用いて3つの先行詞を指している。それに対して、(15)においては、5つの比較的短い文によって構成されている演劇の台本セリフは、4つのゼロ照応表現を用いて2つの先行詞を指している。この2つの例文におけるゼロ照応の使用を通して、文語体は口語体に比べるとゼロ照応表現をより頻繁に使用しているという事象が見られる。それは、ある照応要素について一連の複雑な情報を伝える際に、文語体はそれらを全体として1つにまとめる傾向があるのに対し、口語体は1つの情報を細分にする傾向がある、という結論を得た。

以上、異なる文体におけるゼロ照応の特徴について検証してきた。今回は、書き言葉にゼロ照応が用いられやすいと高原2003の指摘と一致する結論に至ったが、その他の要因(話し手の主観性)もあると考えられるが、別の機会により具体的に示していきたい。

#### 4. おわりに

本稿は、現代中国語におけるゼロ照応という指示表現を考察するために、先行研究の指摘を手掛かりに、分析材料である5篇の短編小説、散文、話劇より収集した例文を中心に検証を行った。その結果、以下3つのことが明らかになった。

まず、ゼロ照応の成立要件の一つは、照応詞の文法的位置によることである。主語としての照応詞が最もゼロ照応にされやすく、その次に目的語、連体修飾格をなす照応詞である。

次に、先行詞と照応詞との距離関係によって、ゼロ照応が使用される頻度も異なる。使用頻度が最も高いのは文内ゼロ照応であり、その次に隣接ゼロ照応と長距離ゼロ照応の順になる。よって、照応詞とその先行詞との距離が近いほど、ゼロ照応表現として使用される可能性も高い。

最後に、異なる文体によってゼロ照応の使用頻度も異なる。書き言葉による文語体ではゼロ照応表現がより使用されやすい、ということが分かった。

しかし、今回の分析結果は限られたデータによるものであり、先行研究の主張を例文考察を通して検証することを中心に行ってきたため、偏りが生じる可能性がある。今後は、まだ解明できていないゼロ照応のメカニズムを考察する必要がある。また、照応詞が頻繁に非明示的に出現する言語である日本語との対照研究を行うことにより、日中両言語におけるゼロ照応の特質を明らかにすることが今後の課題の一つである。

#### <注>

- 1) 本研究におけるテキスト (text) とは、話し言葉を考察する談話、および書き言葉を考察するテキスト (文章) を総称する用語である。
- 2) 結束性とは、Halliday&Hasan (1976) によれば、「ある要素がその解釈を他の部分に依存することによって他の部分と結びつくこと、及び複数の文/節がそれらの間の連鎖的意味によって結びつくこと」である。

- 3) 朱勘宇(2002)によれば、同一話題展開のテキストにおけるゼロ照応は、文法上に動詞述語文の主語、形容述語文と名詞述語文の主語、および主述述語文の主要主語をなす。
- 4) 未知の情報を新情報と言い、それに対して既知の情報を旧情報と言う。
- 5)  $\emptyset_1, \emptyset_2, \dots, \emptyset_n$ は、同一テキストに現れた複数のゼロ照応を表す。
- 6) 陈平(1987)によれば、先行詞の連続性にはマクロ的連続性とミクロ的連続性がある。マクロ的連続性は、先行詞のある文とゼロ照応のある文がテキスト構造における結びつきによって表される、ミクロ的連続性は、先行詞と照応要素の文法的位置によって表される、と説明している。
- 7) 例(16)について、 $\emptyset_1$ と $\emptyset_2$ は後続文主語の連体修飾格ではなく、二重主語文(即ち、“[他]年纪大了点不假,可[他]身体好着呢!”)の1番目の主語であると捉える考え方もあるだろうが、本稿は朱德熙『文法講義』(1995、杉浦博文他訳、白帝社)で指摘された「人称代詞が所有性の連体修飾語になる場合、“我哥哥”のように、“的”が用いられなくてもよい」という考え方に従い、“他年纪”および“他身体”の間にそれぞれ所有関係が存在すると判断する。

#### <参考文献>

- 池上嘉彦(1983)「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育Ⅰ』(日本語教育指導参考書11) 国立国語研究所
- 久野章(1978)『談話の文法』大修館書店
- 仁田儀雄 他(2009)『現代日本語文法⑦』日本語記述文法研究会 くろしお出版
- 陈平(1987)〈汉语零形回指的话语分析〉《中国语文》第5期
- 高原(2003)《照应词的认知分析》外语教学与研究出版社
- 蔣平(2004)〈零形回指现象考察〉《汉语学习》第3期
- 屈承熹(2006)『汉语篇章语法』北京大学出版社
- 王德亮(2005)〈汉语零形回指解析—基于向心理论的研究〉《语言文字学》第2期
- 徐赳赳(2003)《现代汉语篇章回指研究》中国社会科学出版社
- 尹邦彦(1999)〈英语零照应的类型与主要特征〉《解放军外国语学院学报》第2期

中国語におけるテキストの結束性をもたらすゼロ照応について

朱勘宇 (2002) 〈汉语零形回指的句法驱动力〉《汉语学习》第4期

Halliday & Hasan (1976) 『Cohesion in English』 (『テキストはどのように構成されるか——言語の結束性』 安藤貞雄他訳, ひつじ書房)